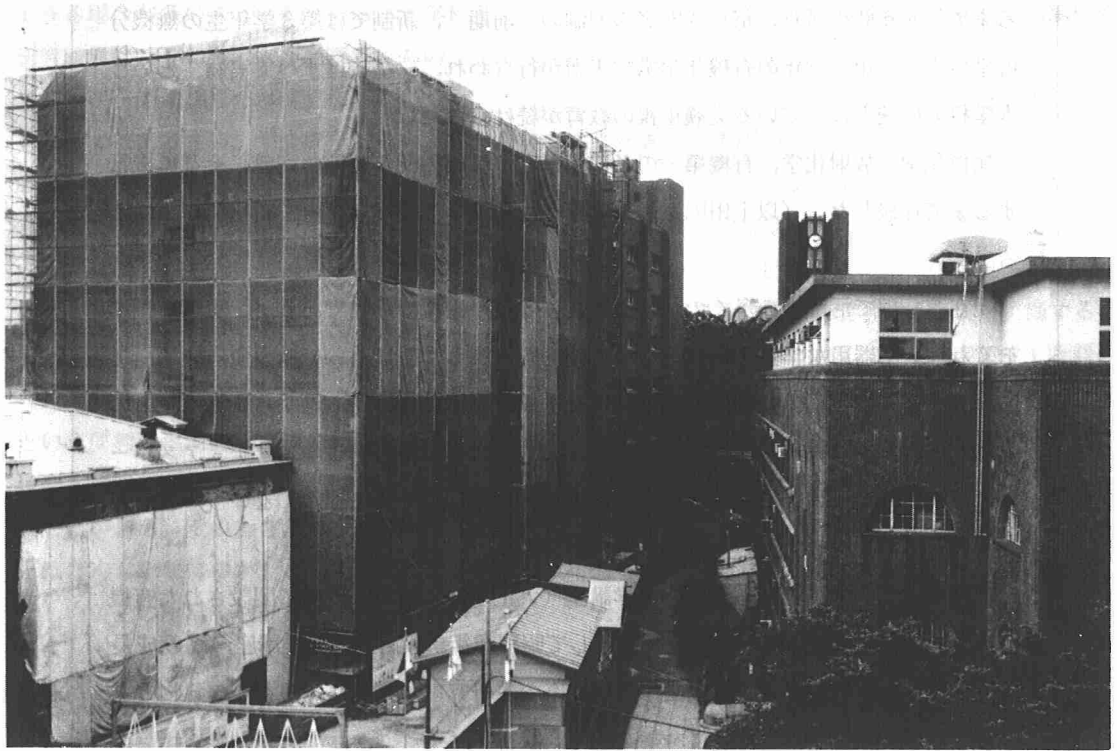


# 廣報

東京大学理学部



## 目次

表紙の説明	1
コロンブスの卵	福島 直 2
禁酒バケツ	岩澤 康裕 3
国際交流室から	守 隆夫 4
セミ雑感	牧島 一夫 5
〈学部消息〉	7

## 表紙の説明

### 建築中の理学部D棟（仮称）

昭和61年11月完成予定で、主として情報科学科が使用する予定。

この場所には大正12年以来今回の取り壊しまで化学の昔は“新館”と呼ばれた旧館北棟があった。昭和37年化学新館（現在の本館）が完成、学生実験室がそこに移転するまで約40年間に亘り、毎年約25名の旧制の“前期”，新制では第3学年生の無機分析学生実験、第4学年の有機化学実験実習が行なわれ、“午後はすべて実験”という本学科の伝統となっている実験重視の教育が続けられた。

無機化学、放射化学、有機第一の各講座研究室は昭和58年新館が完成、そこに移転するまで存続した。（以上田隅三生編 東京大学理学部化学科小史・昭和60年による。）

現在第一線で活躍中の多くの化学者にとって思い出深い建物であるが、実験重視にそぐわない不器用な学生やスポーツに時間を取られる学生にとっては大変辛い場所であった。卒業後、理論物理の教授になったT氏の記憶は液体をろ過する時、ロートの下にビーカーを入れることを何時も忘れて怒られた事であり、日本アマチュアスポーツのボスとして活躍されたM氏には“今後一生、化学はやりません”という一札を入れてやっと卒業させてもらったという伝説がある。

戦後、生物化学に発展した生物化学講座（大正末期）、終戦直前に開設された有機合成講座、“ビキニの灰事件”を契機として昭和32年新設の放射化学講座、高度成長期に新設された無機合成、有機関係の新講座の各研究室が発足したのもこの建物であった。

合成講座、昭和32年新設の放射化学講座、高度成長期に新設された無機合成、有機関係の新講座の各研究室が発足したのもこの建物であった。

この場所は18～19世紀には加賀藩の役付き、単身赴任の藩士達の長大な長屋があった。また、遺跡調査の結果ここには弥生時代の遺跡は無いが、一種の落し穴である“壕”が発見され、縄文時代の狩り場であった事がわかった。

佐佐木 行 美

## コロンブスの卵

福島 直（名誉教授）

私たちの研究では、ちょっとしたことに気がついたおかげで大きな成果が生れることが多い。一見難解そうに見える幾何学の証明問題でも、出題図面中に一本の補助線を書き入れると容易に解決できる場合が多いことに似ている。大学における研究成果は、その殆んどが当事者たちの“コロンブスの卵”的発想または発見にもとづくと言っても過言ではあるまい。学会席上でそのような研究成果を発表して、まわりの人達から「実にうまいところに気がついたものですね」とほめられると、内心では嬉しくても「こんなことは“コロンブスの卵”みたいなものです」と謙遜してみせることもあるでしょう。

数年前のことですが、この“コロンブスの卵”という便利な慣用語が英語を母国語とする人達には全く通用しないことを、私は身をもって体験したことがある。そのとき、「“コロンブスの卵”とはどんな意味ですか」との質問に答えて、私は乏しい英語の語彙を総動員し、冷汗をかきながら手まねをまじえて、ともかく一応その由来が含まれている物語の概要を話した。すると、「あなたのお話はよくわかりました。私も小さい頃どこかでそのような話を聞いた記憶があります。ところでそのようなお話から“コロンブスの卵”がどんな意味を持つ慣用語になったのでしょうか。そこが私にはまだわからないのです」と再度の質問を受ける破目になった。あとで日米口語辞典を引いてみたら、*deceptively easy* とでも言うのがよかろうと書いてあった。

その時以来、私は“コロンブスの卵”という表現が世界のどの国々で通用し、どの国々では通用しないかを調べてみたくなりました。今までに知り得たところでは、スペインは勿論のこと、ヨー

ロッパ大陸ではポルトガル・フランス・イタリア・ドイツ・デンマーク・ノルウェー・スウェーデン・フィンランドの諸国には、それぞれ各国語で“コロンブスの卵”という表現が通用していますが、ロシア語にはないようです。東欧圏諸国に対しては未調査です。

先月フランスのツールーズで開かれた国際会議のときに、米国の H. F. 博士（International Biosphere-Geosphere Project の提案者）が私に「6年後の1992年は、コロンブスが米大陸を発見してから500年目にあたる。その有意義な年になどのような国際的地球物理学関係事業を実施するのが適当であるかについて目下考慮中です」と語ってくれた。私はこの機をのがさず、「ところであなたは“コロンブスの卵”という表現が西欧諸国や日本では広く通用していることをご存じですか？」と聞きましたら、同博士からの返事は私が予想していた通り、「そんなことは始めて聞きました。“コロンブスの卵”とは何を意味するのですか、早速教えて下さい」でした。

私自身の勝手な希望をいえば、米大陸発見500年を機に、米語および英語で *Columbus' egg*（あるいは *egg of Columbus* というべきかもしれませんが）という語を西欧大陸やわが国で通じているような意味を持つ *idiom* にしてもらいたいと思っています。非英語国民にとっては、自国語からの直訳で通じるような *idiom* が一つでもふえることは好ましいことでしょう。国際社会・学会で言葉の上での有利さを満喫している英語国民は非英語国民に対してこの程度の思いやりぐらい示してあげるべきだと私は日頃思っています。

## 禁酒バンケット

岩澤康裕（化学教室）

7月中旬触媒作用に関する国際シンポジウムに出席の為、3年ぶりにソ連のノボシビルスクを訪れる機会を得た。シンポジウムはシベリアのノボシビルスクの科学都市で開かれた。東京は梅雨が明けそうで明けないうとうしい日が続いていた時で、その意味ではノボシビルスクの内陸性気候のからって晴れた空は気分を壮快にするものであった。もっとも1日だけではあるが午後のひと時大降りのにわか雨に見舞われ、オビ湖畔の御婦人達の水着姿を堪能(?)して散歩していた人々は、ずぶ濡れになり、殴米からの出席者達はチュルノブイリ原発事故の放射能を多少気にしていたが、幸い私はホテルで同室の東工大の某教授と昼食後のうたた寝を楽しんでいて難(?)をのがれた。以下に、ゴルバチョフ政策に関連したノボシビルスク雑感を述べてみたい。

7月15日～19日、第5回均一系及び不均一系触媒作用に関する国際シンポジウムがノボシビルスクで開かれ、私は plenary lecturer として招待された。ハバロフスク経由より行程はきついが飛行機の都合で13日成田を立ちモスクワ経由で14日朝ノボシビルスクに到着した。モスクワ国際空港からは科学アカデミーが全てやってくれたので、不安で一方向的なインツォリストまかせのソ連流旅行の厄介にならずにすんだわけであるが、その日の夕方にかけて待っていたのは酒無レセプションであった。ゴルバチョフ政権になって禁酒奨励政策を打出したのは新聞等で知ってはいたが、海外からの招待者や参加者を含む国際シンポジウムにまでその影響があるとは思っていなかったのでソ連組織委員会に尋ねたところ、ゴルバチョフが禁酒政策を唱えた時いち早く賛成を表明したのがこのノボシビルスク科学都市だったそうで、その為他の都市

より厳しくやっているとのことであった。現在酒類は特定の店で2～5時までの短時間一定量のみ売られており、アル中気味の人々が店の前で列をつくっており、従って自動的に一般の人が手に入れられる確率は下がり、飲酒抑制効果はかなりあるようである。

2日目の朝、ホテルのレストランで何人かで朝食をとった時のことである。私は朝一番のセッションの座長であったが少し寝坊してあわててテーブルについた。朝食は簡単なセットを頼んだのであるが、ウエイトレスが規則通り正しくやるので(当り前かも知れないが)座長の時間が間に合いそうもない感じがして、最初のスープを飲み終ったところで片言のロシア語で“ハヤクシテクダサイ”と言いつつ、ウエイトレスはげんなりした顔をして一呼吸おいてから“紅茶かコーヒー”かと聞くので“紅茶”と言ったら2～3分して紅茶が私のところに運ばれてきた。紅茶を飲み終えた頃、同じテーブルの他の人々のところに肉入りシチュウ風料理(日本人には口に合う味)が運ばれてきた。要するに急いでくれということは真中をとばされて最後の紅茶が出てきたわけである。自分が寝坊して時間がないからといって早くしてくれとは日本人にありがちな勝手な言い草ではあるが、ロシア風ユーモア(?)は腹のすくものとなった。その日以来“早く”ということとはタブーになったことはいうまでもない。

3日目の夕方バンケットが催された。場所の狭さの為か、招待講演者(plenaryとinvited)と組織委員会の一部の人々が会議場のレストランで、一般講演者がホテルのレストランで2会場に分かれて行う変則スタイルとなった。さらに変則は会議場レストランのいわば主バンケットで酒類が全

く出なかったことである。我々のはどの乾きをいやす為やむなく甘口のジュースやまずいミネラルウォーターを何杯もおおる結果となった。いくら禁酒賛同都市とはいえ、国際シンポジウムのバンケットにアルコールが出ないとは正直思っていなかった出席者は私一人ではないと思う。余り盛り上がりなかったことは言うまでもない。一方、ホテルのレストランで開かれた方はたっぷりとアルコールが出されたということを聞き何とも解釈できないことであった。ついでに言うと、周辺には到るところ白樺林には大きいダニが生息してお

りこれが眠り病に似た風土病を媒介する。

悪いことばかり言うつもりは無いので最後に楽しかった一夜について述べたい。シンポジウムもあとオビ川の船旅観光を残すのみとなった夜、組織委員のひとりの家に他の人々と一緒に招かれ、ワイン、コニャック、ウォッカ等を飲みながら歓談をしたことは良い思い出になった。私は日常余り酒を飲まないが、やはりある程度アルコールが入った方が、Science 以外の話を咲かせる時は良いように感じられた夜であった。

## 国際交流室から

守 隆 夫 (動物学教室)

この度、私は外国人留学生指導担当という仕事をさせていただくことになりました。指導担当といっても、専門的な学問についての指導というわけではありません。私の専攻は動物学の一分野、内分泌学というものですし、留学生諸君もそれぞれ異なる学問分野で、専門家として一人立ちするための勉強をされているのですから、それぞれの専門分野の難問を解決することはお互い不可能です。また、その為に留学生諸君には同じ分野の先生方が指導官としておられるのですから、そんな必要もないわけです。そこで私の任務は、馴れない外国(日本)に來られて勉強されている留学生諸君が、すこしでも気分よく勉強に打込むことのできる状態を作り出すことであると考えています。では具体的になにをするのか、すこし書いてみます。

私自身のアメリカ留学時代の経験をもとに考えてみると、まず第一に重要なことは留学生諸君が親しい友人をつくることで、そのためのお手伝をしようということです。留学先の国の人と仲良くなることは、ごく自然にその国の言葉を覚えてい

くこととなりますし、また、その国の慣例、生活様式などに馴れることにもなり、新しい環境に溶け込みやすくなると思います。単なる友人ではなく親友、何んでも相談できる人が必要なのです。真の心のかよう親友がしてくれるのは、本人の心掛け次第ですが、なるべく多くの日本人学生と知り合う機会をつくって、親友と出会う機会をすこしでも多くしてあげようというわけです。次に、留学生同志の交流も大切なことなので、その場をつくろうということです。多くの場合、日本人は外国で暮らすとあまりにも団結しすぎて、いわゆる日本人村をつくってしまい、結局短期間の留学中その国を、あるいはその国の人々を知る機会を自から失なう場合がままあります。こういった閉鎖的な付き合いはいけません、先輩の助言は必ず役立つものです。留学生諸君がそれぞれの専門分野で勉強されているかぎり、自宅と大学の往復だけになることは明白です。故国の、あるいは他の国の留学生と知り合う機会意外と少ないのではないのでしょうか。そこで毎月何回か留学生の集まる場をつくる予定です。そこでは自分の勉強して

いる分野の話、素人にも判るように平易に発表してもらつつもりです。また聴く方も、たまには全く違う分野の話で視野を広げることが出来るはずです。同じ環境にある学徒同志の話し合いは、学問上の問題の解決につながる有益な示唆、あるいは生活上の問題に対する良い解決策など、必ず得るところが大きいと思います。以上のような事からまずやっていくつもりです。

一方、留学生の受け入れ側として、留学とは勉強することだけであるなどと考えてもらっては困るのです。留学先の国に対して良い感情を持って帰国してもらうことは、将来の日本にとって一つの無形の海外財産として有益であることは明白です。これが反対になった場合、その損失は計り知れないと思います。そこで大学および文部省に対しては、留学生のための寮施設の充実などを、お願いしてゆきたいと思いますが、我々だけでもす

ぐに出来ることもあるはずです。例えばアメリカの私の留学先では外国人留学生のために、生活用品を貸してくれるシステムがありました。これなどはすぐにでも実行できることと思います。大学のどこかに不用になった食器、ナベ、カマ類を集めておき、外国人留学生に優先的に、お役所的な面倒な手続きなしに、サイン一つで貸し出すとよいと思います。

これから留学生諸君との交流が深まれば、また良い考えも浮ぶと思います。まだ留学生諸君の集まれる場所の設定など、決定していないこともあって、そんなに活動はしておりませんが、留学生を受け入れられておられる教官の方々は、どうか一度は私のところに雑談でもしに来るよう彼等にお伝え下さい。あまり形式ばらず気楽に話し合っ、だんだん留学生諸君の気持を理解していきたいと思っております。

## セ ミ 雑 感

牧 島 一 夫 (物理学教室)

子供の頃から、夏が大好きだった。自分の子供達が虫捕り網を振り回すようになったこの期に及んでも、セミは私にとって欠かすことのできない夏の演出家である。産卵に清潔な水を必要とするトンボ類は悲しいかな激減しつつあるが、セミたちは幸いまだ健在である。今年も、ようやく家の近くでニイニゼミが鳴き出したとか、本郷キャンパスでミンミンゼミの初鳴きを聞いたとか、子供達よりこちらが浮かれている始末だった。それでも、この2月に打ち上げる予定の科学衛星の準備作業が気になってか、柄にもなく払暁に目覚めてしまう朝がある。空が白み始めるほんの短い時間帯に、夢のように一斉に鳴くのは、近くの丘陵にすむヒグラシたちだ。フトンから転がり出して眠りこけている子供達をゆり起こして、「ほら、

ヒグラシは夕方だけじゃなく朝も鳴くんだぞ」と教えてやりたい誘惑にかられる。そしてずっと昔、父親から同じような話を聞いて育った記憶を思い返したりしている。

耳慣れた平地性のセミの他にも、山地特有のセミがいる。私は大学でワンダーフォーゲル部に籍を置いてから、彼等と近づきになった。5月、エゾハルゼミは早くもカッコウやツツドリに混じって、ヒグラシに似た歌を新緑の山々に響かせる。盛夏の亜高山帯では、雄大な夏雲に向かって、のろまなエゾゼミの声が峰々から立ちのぼる。そんな中で汗と泥にまみれた2週間の夏合宿が続くのだった。

中国大陸からの留学生に尋ねたら、向こうにもセミはたくさん居るとの返事だった。昆虫の豊富

な台湾は言うに及ぶまい。ところが欧米の科学者たちに「Cicada を知っていますか？」と尋ねて回っても、知らないという答ばかりである。一昨年の夏に国際会議で訪れたイタリアでも、セミの声らしきものは聞かれなかった。もっとも同様に昨年訪れた米国ニューメキシコでは、それとおぼしき声を聞いたが、姿は確認できずじまいだった。

いま準備中の科学衛星には、英国と共同で宇宙X線の検出器を載せようとしている。このため英国人とはここ数年のつき合いが続いているが、彼等はもちろんセミを知らない。残暑の厳しい頃、来日した2人の英国人が、炎天下の道ばたで議論していた。一方が言うには、「この電柱の上の方で大きな雑音がする。きっと多湿なせいで、電力線が放電しているに違いない。」これに対し、来日の経験のより多いもう一人は、「たぶんこれは我我の知らない生き物の声だと思うよ。」電柱のてっぺんでは、折しも一匹のアブラゼミが熱唱中であつた。

やはり9月に、短期来日している米国人教授とセミの話をしたことがあつた。彼はアブラゼミとミンミンゼミの鳴き声を認識できていた。ところが大音声のツクツクボウシは、てっきり鳥の一種と置いていたらしい。それが親指ほどの小さい昆虫だと知って、彼はたいそう驚いたのだつた。

オスのセミの腹部はほとんど空洞で、さながら体の全体が共鳴器になっている。だが彼等は、なぜあんな大声で歌う必要があるのだろうか。それに人間よりずっと体の小さいセミの声が、なぜ我々の可聴周波数帯にはいつているのだろうか。弦楽

器でも、管楽器でもサイズが小さくなればそれに応じて音域も高くなるというのに。そしてそもそも、人間や他の動物の可聴周波数帯は、どのように決まったものなのだろう。またセミの幼虫は、土の中に7年間も暮らして、地上に出て成虫になると10日ほどで死ぬという。この7年という時間スケールは昆虫一般に比べると格段に長いように思われる。彼等はなぜこんな長い地中生活を送るようになったのであろうか。いろいろ疑問は尽きない。

セミの分布も興味深い。西南日本に広く分布するクマゼミは、伊豆や湘南地方が北限で、都内では極めて稀である。ヒグラシは都内ではけっこう多いが、名古屋市内には居ないそうで、名古屋出身のある先輩は夏の夕刻にわざわざ列車に乗り、ヒグラシを聞きに山麗まで通ったそうだ。私の家内の実家のある秋田市内にはヒグラシが居ないが、少し山に近づけばたくさん住んでいることも発見した。

本郷キャンパスを含め、都心部ではミンミンゼミが優勢だが、駒場から西の方にかけてはアブラゼミが圧倒的に多くなる。事実、私の育った杉並区では、ミンミンゼミは稀少価値ものだった。こんな狭い範囲で両者の分布の違いを作り出している原因は、何であろうか。そんなことを考えつつ、私は今日も本郷と駒場の宇宙科学研究所とを、あたふたと行き来している。学部と、共同利用研究。それぞれ異なる悩みを抱えているが、何とか互いに補いあって共栄をはかりたいものである。

## 《学部消息》

### 教授会メモ

61年6月18日(水) 定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議題 (1) 前回議事録承認  
(2) 人事異動等報告  
(3) 人事委員会報告  
(4) 教務委員会報告  
(5) 昭和61年度私学研究員の受入れについて  
(6) 昭和61年度免許教科に関する認定科目表について  
(7) その他

61年7月16日(水) 定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議題 (1) 前回議事録承認  
(2) 人事異動等報告  
(3) 昭和61年度公立大学研修員の受入れについて  
(4) 人事委員会報告  
(5) 教務委員会報告  
(6) 会計委員会報告  
(7) 企画委員会報告  
(8) その他

61年7月7日(月) 教授懇談会

理学部4号館1320号室

- 議題 (1) 入学試験制度について  
(2) 大学院問題について

訂正

前号(18巻1号 昭和61年6月) 教授会メモ 61年3月19日(水) 定例教授会の記事のなお書き中、「飯野」とあるのは「飯田」の間違いでした。お詫びして訂正いたします。

### 人事異動

(講師以上)

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
数学	講師	鈴木 貴	61. 6. 1	昇任	助手から
生化	助教授	荒田 洋二	"	"	薬学部教授へ
中間子	客員教授	山田 作衛	61. 6. 16	併任	本務：核研教授 62. 3. 31まで
動物	講師	井尻 憲一	61. 7. 1	昇任	助手から
植物	"	大隅 良典	"	"	"
数学	助教授	川又 雄二郎	61. 7. 16	"	講師から
物理	"	十倉 好紀	"	"	工学部講師から
生化	"	室伏 擴	"	"	講師から
"	"	横山 茂之	"	"	助手から



(助 手)

所属	官 職	氏 名	発令年月日	勤務内容	備 考
中間子	助 手	今 里 純	61. 6. 1	昇 任	高エネ研助教授へ
化 学	"	中 井 俊 一	"	採 用	
情 報	"	清 水 謙多郎	61. 6. 16	配 置 換	大型計算機セ助手から
化 学	"	正 田 晋一郎	"	転 任	東北大助手へ
物 理	"	三 明 康 郎	"	休 職	62. 2. 15 まで
鉦 物	"	芳 賀 信 彦	61. 6. 21	復 職	
物 理	"	豊 島 近	61. 7. 1	休 職	62. 2. 30 まで
"	"	勝 本 信 吾	"	採 用	
生 化	"	岡 田 清 孝	"	転 任	岡崎共同研究機構助手へ
中間子	"	松 崎 禎市郎	61. 7. 31	辞 職	理化学研究所へ
地 物	"	兼 岡 一 郎	61. 8. 1	昇 任	地震研究所助教授へ
物 理	"	大 橋 隆 哉	"	採 用	

(職 員)

中間子	事務室主任	塩 見 イソコ	61. 6. 15	辞 職	
天 文	事 務 官	渡 邊 典 子	61. 7. 31	辞 職	

外国人客員研究員

所属	受入れ教官	国 籍	氏 名	現 職	研究期間	備 考
中間子	永嶺助教授	ア メ リ カ	J. H. Brewer	TRIUMF 研究所助教授	61. 8. 15 ~ 61. 9. 16	
物 理	小柴 教授	カ ナ ダ	Hay Boon Mak	Queen's Univ. 助教授	61. 9. 1 ~ 62. 12. 31	

## 理学博士の学位授与者

〔昭和61年4月28日付（3名）〕

専門課程	氏名	論文題目
論文博士	白石 寛明	質量分析法による水中微量有機化合物の分析
相関理化学	石田 信宏	ニューカッスル病ウイルス遺伝子の構造に関する研究
情報科学	平林 敬	数式処理計算機の研究

〔昭和61年5月19日付（2名）〕

論文博士	牧島 一夫	硬X線における「かに星雲」の空間構造
論文博士	山内 薫	回転異性，核四極子結合，ファンデルワールス相互作用の構造化学的研究

〔昭和61年6月16日付（4名）〕

論文博士	伊藤 敏幸	パン酵母を用いるケトン類の不斉環元における立体選択性の制御と新しいキラルシントンの開発
植物学	宮田 和恭	沿岸海域におけるリンの動態の研究
論文博士	村田 滋	安全な回転異性体の反応性：9-（2-置換6-メチルフェニル）フルオレン誘導体における研究
論文博士	左右田 龍太郎	低エネルギー希ガスイオンと固体表面との相互作用に関する研究

〔昭和61年7月28日付（7名）〕

物理学	吉田 伸夫	摂動論的量子色力学における赤外発散と漸近的な長距離相互作用
物理学	富谷 光良	シュヴィンガー項と重力異常項
地球物理学	石田 十郎	Pc 1 地磁気脈動及びその極磁気嵐との関係についての研究
地球物理学	星野 眞弘	プラズマ運動学的現象の計算機を用いた理論研究：テイアリング・モード不安定と衝撃波前面のサイクロトロン相互作用
論文博士	月村 勝宏	ペントラングナイト (Fe, Ni) <sub>9</sub> -xS <sub>8</sub> における結晶内陽イオン分布の温度圧力効果
論文博士	馬場 祐治	軽イオン衝撃した金属及びセラミックスの表面化学状態に関する研究

〔修業年限の特例による特別審査〕

物理学	田中 成典	誘電関数法による高密度プラズマの理論：熱力学関数，輸送係数，動的相関
-----	-------	------------------------------------

# 海 外 渡 航 者

( 6 ヶ月以上 )

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
天文	助教授	吉村 宏和	アメリカ合衆国	61. 7. 12 ～ 62. 7. 18	太陽性の対流層内部の対流と磁場の非線型相互作用の研究のため
数学	助手	岡本 久	アメリカ合衆国	61. 7. 20 ～ 62. 7. 19	スーパーコンピューターの研究集会及びミネソタ大学の数学とその応用の研究所の1年間の研究プログラム「科学的数値計算」に参加のため
化学	助手	林 秀則	アメリカ合衆国	61. 7. 26 ～ 62. 7. 25	ラマン分光学に関する研究のため
物理	助教授	永宮 正治	アメリカ合衆国	61. 7. 31 ～ 62. 5. 15	高エネルギー重イオン反応の日米共動実験参加のため
天文	助手	斉尾 秀行	アメリカ合衆国	61. 9. 3 ～ 62. 8. 31	天体物理学に関する研究のため
数学	助手	斉藤 秀司	アメリカ合衆国	61. 8. 18 ～ 63. 8. 17	高次元類体論の研究をアメリカ合衆国にて紹介するため

## 昭和61年度科学研究費補助金理学部申請・採択件数一覧表 (追加分)

昭 61. 8. 15 現在

研究種目	申請件数	採 択 件 数			採 択 率
		新 規	継 続	計	
特別推進研究 (1)	2		2	2	100 %
特別推進研究 (2)	5	1	4	5	100 %
特 定 研 究 (1)	1		1	1	100 %

(注) 理学部関係の採択総額は, 1, 138, 340, 000 円 (遺伝子実験施設 1, 600, 000 円: 外数) となりました。

## 理学部長と理職の交渉

理学部長と理職の交渉は、この間昭和61年5月19日、6月16日、7月21日に行われた。主な内容は以下のとおりである。

### 1. 技術系職員への専門行政職俸給表適用について

標記の件について、昨年来、学部長と理職の間で交渉が積み重ねられてきているが、7月の交渉においては特に大詰めをむかえた情勢について議論が集中した。この中で学部長は、「この件については、昨年夏、理職から提出された『専行職俸給表適用に関する基本要素』を尊重して、技術系職員の全員移行のために最大限努力してきた。しかし、壁は厚く、全員移行は難しいといわざるをえない。また行(二)技能系職員の移行も困難であろう。国大協としても『行(一)技術系職員を、技術官と実験実習官に区別し、前者にのみ専行職俸給表を適用する』ということはやむをえないとの見方が大勢を占めている」という情況認識を述べた。これに対し、理職は職場に分断がもちこまれるような適用にはあくまで反対するとの見解を重ねて表明した。この件について、両者はひきつづき緊密に協議することを確認した。

### 2. 昇格について

理職は、行(一)技術6級、5級、4級、行(一)図書5級、4級、3級、行(一)事務5級、4級昇格及び3級主任要求、行(二)労務の4級、2級などの昇格対象者について、早期に昇格が実現するよう要望している(理学部広報、18巻1号、61年6月号)。この間、その一部が実現したことに対し、理職は学部長等の尽力を多しつつも、

ひきつづき努力するよう要望した。また、理職は、本年度中に昇格基準を満す職員については、来年4月1日をまたず本年度中に昇格が実現されるよう強く要求した。学部長は、理職の要求に理解を示し、実現のために努力することを表明した。

### 3. 健康管理問題について

理職は、標記の件の重大性に鑑み、「昨年実施された健康管理アンケート結果の公表と、毎年実施されている職員健康診断の改善」を要望した。学部長は、「VDT労働が質的・量的に拡大していることもあり、重大な関心を寄せている。アンケートについてはできるだけはやく公表したい。健康診断の改善は検討するが、今年度分については困難だろう」と述べた。

### 4. 行(二)職員の(一)振替えについて

標記の件については、かねてより理職から要望されているが、これについて学部長は、「振替要求の職務内容からみて振り替えが妥当な職員がおられることは承知しており、努力中である。また、理職から出されている振替要求のなかには、職務評価を検討しなおすことを含んでいるものもある。これについては、現在、当該部署の教官の方にも検討をお願いしている」と答えた。

### 5. その他

定員外職員の定員化、教務職員の助手化、理学部将来計画、第7次定員削減などについて議論された。

## 各号館（運営委員）長名簿

（61. 8. 1 現在）

号館名	所属	職名	氏名	内線番号	任期
1	物理	教授	清水忠雄	4167	61. 4. 1 ~ 62. 3. 31
2	人類	教授	尾本恵市	4482	61. 8. 1 ~ 61. 11. 30
3	地球物理	教授	佐藤良輔	4293	61. 4. 1 ~ 63. 3. 31
4	物理	教授	小林俊一	4157	61. 4. 1 ~ 62. 3. 31
5	地質	教授	飯山敏道	4514	61. 4. 1 ~ 62. 3. 31
化学	化学	教授	富永健	4346	61. 4. 1 ~ 63. 3. 31

### 編集後記

9月号には福島，岩澤，守，牧島の各先生のエッセイを頂きました。コロンプスの卵に関する話題は尽きず，日本でも“ハナ ハト マメ”から“サイタ サイタ”の世代までは国定教科書にあったから知っているが，其の後の世代は知らないのでは無いかと言う人も有りますが如何なものでしょうか？

表紙用の写真，又はグラフィックスを募集致します。5人の委員の誰かに御一報下さい。

（佐佐木）

---

編集：

佐佐木 行 美 (化学)	内線	4359
佐 藤 勝 彦 (物理)		4207
松 野 太 郎 (地物)		4294
高 橋 正 征 (植物)		4474
田賀井 篤 平 (鉱物)		4544